

とかす力 (八木重吉の詩を愛好する会会報)

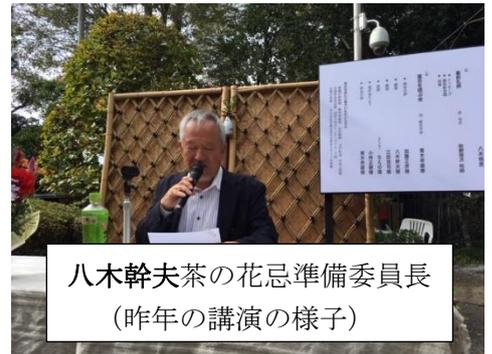
事務局 (連絡先) 〒277-0014 千葉県柏市東 3-8-34 柏第一宣教バプテスト教会
***** 天利武人 (教会牧師) 電話 04-7164-9159
(会報編集、ホームページの連絡先) 〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継
***** Eメール kmat27aiko@gmail.com 携帯電話 09061674553

☆ 第 20 号
☆ 2020 年 (令和 2 年)
9 月 15 日 発行

★ 2020年の茶の花忌中止案内

新型コロナ感染のために時代が一気に変わってしまったような年になってしまいましたが、皆様はお元気ででしょうか。夏になったら少しは収束に向かうのではないかという予測は外れ、経済活動の再開とともに、ますます拡大しつつあり、秋から冬にかけては本格的な第二波が来るかもしれない状況です。日本で感染が問題になり始めた2月からずっと早く収まることを願い、5月の連休明けまでにはどうか、次には、梅雨明けにはどうかと見守りながら、茶の花忌の開催について考えてきましたが、3月に発足した茶の花忌準備委員会 (八木幹夫委員長及び7人の委員) の正式な結論として、今年の茶の花忌は墓前礼拝も偲ぶ会も中止と決定しました。

八木重吉記念館 (生家) の佐藤ひろ子様は、「長年続いている茶の花忌を中止するのは、全国の愛好者に申し訳ないことですが、不特定多数の人々が集う催しですので、中止せざるを得ません。今年は親族だけの普通の墓参にさせてください。私の個人的な思いと、茶の花忌の開催を援助して下さる目的で発足した準備委員会の結論が一致しましたので、今年中止とさせていただきます。」とのこと。多くの行事が早々と中止を決定する中で、準備委員会としては、ひょっとしたらコロナ感染が収束の方向に向かうかもしれないという一抹の望みを捨てずに7月末まで結論を留保してきましたが、ここで正式に決定しました。



八木幹夫茶の花忌準備委員長
(昨年講演の様子)

なお、お願いですが、「とかす力」が届いた皆さんや、生家からの中止案内が来た方にはご理解いただけていますが、それ以外の方々に、皆さんがご存じの愛好者が居ましたら、連絡を取る機会があった時に、茶の花忌中止の旨お伝え願えればと思います。

★ 新発見—1915 (大正4) 年の『八木重吉英文日記』刊行の案内

前号の「とかす力」19号でお伝えしましたように、1915 (大正4) 年に書かれた八木重吉の英文日記の翻訳が完了し、皆さんにも早く公開したいと思ってきましたが、コロナ感染の年になって世界が動揺している時期に文化的な出版はいかなものか様子を見てきましたが、茶の花忌が中止となってしまう、全国の愛好者の1年に1度の楽しみが奪われてしまったと感じる人も多いと思い、新発見の105年前の貴重な重吉の日記を、皆様に公開することで希望になると思い、出版を決断しました。B6版で約200ページの本になります。

監修者 (佐藤ひろ子様) と翻訳者 (小林正継) の自費出版ということもありますが、今回の出版を機に、八木重吉記念館内にある研究資料の保存や、今後どんどん増えて行く関係資料を収納するための管理倉庫の、将来における建設を想定して、今から資金をためておこうと思いますので、是非『八木重吉英文日記』の購入という形で協力していただければと思います。茶の花忌の開催予定だった10月26日を目標に刊行予定です。

発売元の「いのちのことば社」の他に、「八木重吉記念館 (佐藤ひろ子様)」と「翻訳者の小林正継」のところで本を保管する事になっていますので、10月26日が過ぎましたら、連絡しやすいところに申し込んでください。郵送の場合、原則として定価+送料になりますが、親しい書店を通したり、佐藤様や小林から手渡しで購入する場合等で差が出ることはご了解ください。定価は2000円近くになりますが、越えないように努力します。

住所や FAX、メールは以下の通りです。

佐藤ひろ子 (八木重吉記念館) 〒194-0211 東京都町田市相原町 4473 FAX 042-783-1877

小林正継 〒270-1406 千葉県白井市中 205 電話 090-6167-4553 Eメール kmat27aiko@gmail.com

いのちのことば社 〒164-0001 東京都中野区中野 2-1-5 営業部 03-5341-6920 FAX 03-5341-6921

★古い資料の紹介

「とかす力」16号で野坂純一郎（重吉の弟）の「加藤武雄と八木重吉」、

「とかす力」18号で神原克重（柏の学校の同僚）の『『貧しき信徒』を読みつつ」、

「とかす力」19号で加藤武雄（重吉の又従兄弟で恩師）の『『秋の瞳』の巻首』及び『『貧しき信徒』の序』と紹介してきましたが、今回は、高校2年生の生徒が調べた御影時代の重吉の姿を伝えてくれる文章を紹介しします。神戸山手女学院文芸読書部の生徒達で、彼女たちが発行していた『ちいさな灯』という雑誌28号（八木重吉特集号、昭和49年8月15日発行）の中の、重吉の教え子の飛松さんと門脇さんから聞いた話を紹介しします。

飛松実さんのお宅を訪問して

「八木先生の授業はどんなでしたか。」

飛松「先生は、一方的に授業を進めて行ったので、全然わからなくなって、学期試験にクラス全員が白紙を出した。このころは、特に師範学校では今の時代のように英語を重視していなかった。次の授業の日に先生は紙をくばり私のいたらないところを書いて下さいと言われました。」

「手紙をいただかれたことがおありですか。」

飛松「大正十五年私が師範五年の時「甲陽」という雑誌の編集部長をした時、原稿を送ってもらいたいとの手紙を出したら、先生は、聖書を読みなさいと言う意味のことをかいた手紙を下されたのですよ。その時私はぐうぜん本屋で『秋の瞳』という本を見つけたんですよ。私は、それまで先生が詩を書いていらっしゃるなんてことを、知らなかったんですよ。おどろきました。油絵を描いておられるのは知っていたんだけどねえ。」

「詩について生徒に何か話されましたか。」

飛松「私は聞いたことがありませんね。ぜんぜん、知りませんでしたよ。」

「奥さんとお会いになったことがありますか。」

飛松「それがねえ、私はあったことは全くないんです。手紙のやりとりだけですな。東京に行ったとき、鎌倉へよりたいと思っているんですが、なかなか・・・ね。奥さんは、まあ、その時、あなたたちと同じような年だったですが。」

「キリスト教について何か話しておられましたか。」

飛松「何も聞きません。」

「生徒から見て八木重吉の性格をどうお思いになりましたか。」

飛松「まじめな先生で、やさしくって、ひかえめでおとなしいし、純粹で、生徒を全然しかったりしないんですよ。あっ、そうそう、坊ちゃんのような可愛い感じでした。」

「八木重吉の詩をどう思われますか。」

飛松「作品と作者が一致しているのですばらしい。今日では、詩は作られたような作品が多い。しかし、八木先生の詩は作者と作品が密着していて、技巧をこらさないところに純粹な感動をよび起こします。」

門脇清さんのお話から

御影師範学校で教えを受けました私と八木先生との交わりは教師と生徒という以上に深いものでした。亡くなられた後も、事ある毎に先生が見ておられると思い、自分を反省する事も度々でした。よくお宅に伺いましたが、先生はいつも二階で勉強しておられました。奥様があられにのりを巻いたのを出して下さって大変珍しくておいしかったのを覚えています。夫婦というより仲のよい兄妹のように見えました。

先生は分厚い綴じたたくさんの詩稿をめくりながら、人にきかせるというのでもなく声に出して読んでおられた事があります。「万葉集を読みなさい」とよく言われ「現代詩人で心をひかれるのは山村暮鳥だけだ。」

「外国の詩人ではキーツだ」とも言われました。教会へ行かれたことを聞いたことがありませんし、宗教に

ついて聞かせて下さった事ありません。ただ、学校をやめられる日が近付いたある夜、私を宿直室に呼ばれて色々お話をしましたが、それが先生とお話をした最後だったのですが、帰り際に私に言われたのは「叩けよ、さらば開かれん。求めよ、さらば与えられん。」という有名な聖書の言葉でした。

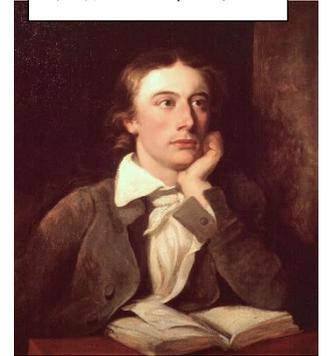
二年生の時、絵の好きな者が集まって美術クラブをつくろうということになり、私とその世話役を致しましたが、その時八木先生が大変協力して下さいました。初めに伺ったのは住吉のお家で、高等師範を受験する学生と一緒に下宿しておられました。その次先生が遊びにこいとと言われて、伺ったのは前の家からずうっと下の方の御影のお家でした。親切な奥様が居られました。

小学校のころつくった詩を詩集にして見ていただいたこともあります。写生に行こうと誘って下さって住吉川に沿って歩き、その時は林を描きました。奥さんも一緒についてこられました。なつかしい思い出です。

★ 故武田孝一さんのキーツと重吉の関係について述べた遺稿紹介

3年前に亡くなられ、熱心な愛好会員でもあった武田孝一さんが2005年の夏に書かれた「重吉の哀しみとキーツへの憧れ」の中で、秋が好きで処女詩集に『秋の瞳』と付けた重吉の思いの中に、イギリスロマン派の詩人ジョン・キーツの影響があることを指摘し、さらに生家の詩碑になっている「素朴な琴」にも踏み込んだ分析をした部分がありますので、今回紹介したいと思います。

ジョン・キーツ



こうした、孤独感のなかで、彼が気を許し、そのなかに入り込んでいる限り、まったくといってよいほど、素直に心の安らぎを感じていたものがあつた。それは、イギリス・ロマン派の代表詩人の一人ジョン・キーツ（1795－1821）の作品であり、万葉集、芭蕉、そして、愛妻とみ子と二人の幼児とのそのまま聖家族とでもいうべき家庭生活であつた。淋しい日常のなかでも、重吉がそのまま、心素直になれる世界と対象があるなかでも、キーツの世界は、文字通り、100%それこそ、手放しで、全身を投入できるものではなかつたろうか。

その一つの例として、「秋への賦」To Autumn を引用してみたい。この詩は、キーツが英国の Winchester に滞在していたとき、1819年の9月に詠まれたものである。

苔むした小屋に林檎をたわわに実らせ
果物を芯まで熟させ
ひょうたんを膨らませ、ハシバミの殻に丸みをもたせ
甘いその髓まで太らせる (5－9行 引用者訳)

という第一連の一部からも、むせるような英国の秋の田園風景が偲ばれる、と思う。重吉は、季節のなかでも、殊更に秋を好んだようであるが、勿論、重吉の資性もさることながら、この詩にみられるような、キーツの影響も否定し得ないのではなかつたろうか。その例として、

果物
秋になると
果物はなにもかも忘れてしまつて
うっとりとして実つてゆくらしい

『定本八木重吉詩集』(筑摩書房1959、以下「定本」と略) 65ページ

を挙げてみたいと思う。さて、万葉集、芭蕉、キーツ、愛児の桃子ちゃんを熱愛した重吉の感性のなかで、これらのもののなかに共通するものを想像すると、①混じりけのない純粹さ、②まったくの安心感、③豊かな作詩の源泉、といったあたりを指摘できると思う。

ジョン・キーツ (John Keats) は、1795年ロンドンに生まれ、クラーク学院を中退後、エドモントンの医師トマス・ハモンドの見習い書生となり、1816年に、医師開業免許を取得し、ガイ医学校病院に勤務した。しかし、このころ、医学を断念して、詩に生涯を捧げようとしたとされる。1817年に物語詩 Endymion (牧人エンデミオンが、月の女神を求めて旅する話)を書き、翌1818年には、同じくギリシャ

神話にもとづく長編詩 Hyperion を起稿した。(これは、オリンパス山の神々の前に世界を支配した巨人神タイタンとその、後継者の物語り) 1819年には彼の傑作といえる、「つれなき美女」、「ギリシャ古甕のうた」、「夜鳴鶯に寄せるうた」、「憂愁についてのうた」、「怠惰についてのうた」、「秋によせての賦」などがつくられた。同年フランスス・ブラウンとの結婚を決意したが、彼の発病と早世で実現できなかった。同じく、この年、「レイミア」、「ハイペリオンの没落」を起稿。1820年に2度にわたって咯血、9月、友人セヴァーンとイタリアへ療養にでかけ、ローマのスペイン広場右手のアンナ・アンジェリッテの家に下宿。1821年2月23日、この家で逝去、25歳。2月26日に、ローマの新教徒墓地に埋葬された。

キーツはイギリス・ロマン派を代表する詩人の一人であり、天才的な詩語の選択と、詩行の構成、表現の巧みさなどにより、シエクスピアの再来、あるいは、シエクスピアを越える、と評する人もあり、25歳の早世とあいまって、今日にいたるまで、多くの愛好者を有しているのである。彼の詩はテーマは、愛と美における心酔を、藝術至上主義的手法で歌い上げた、とあってよいと思う。重吉がキーツに惹かれたのは、キーツの美を追求する心、「美しいものこそ真理である (Beauty is truth)」とその詩の中で語る、彼の人生観に共感したからではないかと思う。

重吉の代表作とされる”素朴な琴“の4行目の‘琴はずかには鳴りいだすだろう’にしても、ギリシャのイオニア地方の伝説にある、屋外に置かれた「琴」が、天地の間を流れる一種の靈氣にふれて、自ずから、妙音を奏で出す、という故事を背景において読んでいく事ができる。ここにも、キーツとその背後に在る、ギリシャ神話、地中海の青い空と海への限りない重吉の憧れを読み取る事ができると思う。

★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

皆さんの、愛する重吉に対する思いを原稿にしてください。第5集に向けて作成を目指しています。どうぞ奮って原稿をお寄せ下さい。

(募集) 題:「八木重吉との出会いとその詩の魅力」(この内容に沿うなら別のタイトルでもOKです。)

字数: 2000字程度(原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎)

締切: なし(随時お送りください)

送り先: メール (kmat27aiko@gmail.comへ) か

郵送で 〒270-1406 千葉県 白井市 中205 小林正継 へ

「八木重吉との出会いとその詩の魅力」は、愛好者の皆様が著者になる本として近い将来1冊にまとめたいと思っています。まだ4集(12人の愛好者)の段階ですが、加速させたいと思っています。ぜひ原稿を書いて下さい。よろしくお願ひします。データとしてまとめてある方は、すぐにでも送って下さい。

★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス <http://www.yagijuaiko.com/> (作成途中の部分があることをご了解下さい)

Eメールアドレス kmat27aiko@gmail.com (管理者小林正継)

★百年に一度の出来事(百年前はスペイン風邪)

新型コロナウイルスによるパンデミックは、百年に一度の出来事として認識されています。2020年の百年前の感染症は、スペイン風邪と呼ばれています。当時の世界の人口(約20億人)の約50%が感染し、25%が発症。死者は5000万人ともそれ以上ともいわれています。日本では1918年の11月に全国的に流行し、1919年、1920年の3年間で人口(約5000万)の約半数の2380万人がかかり、約39万人が死亡したと報告されています。

日本での流行2年目の1919(大正8年)の12月、八木重吉もこのスペイン風邪にかかり、神田駿河台の橋田病院に入院し、かなりの重体になりました。しかし命を取り留め、2か月余りの入院生活ののち退院し、堺村の自宅に帰って療養し、何とか回復しました。そして寮に戻ろうとしたものの、感染を恐れる周囲の目が厳しく、知人の紹介で池袋の素人下宿に移りました。このことが近くに住んでいた島田とみとの出会いを導くことになったのですから、不思議なものです。

しかしコロナの感染症は、医学が発達した百年後の現在でも怖い病気です。皆さん、十分注意してください。